来来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

㉖ビスカイノ、気仙沼湾に入る

気仙沼湾は最良の港

雄勝湾を出たビスカイノは、大いなる入江に入った。Ｏｒｉｔａｔｅ（折立、南三陸町）という村に宿泊したとあるので志津川湾だろう。翌日は海路と陸路を経てＵｔａｃｈｏ（歌津）に着き、次の日にはＱｕｅｘｉｎｏｍａ（気仙沼）に至った。ここの大きな入江（気仙沼湾）には、考えうる限り最良の五つ港があった。

その五港とはどこか。一つは気仙沼村の港で、サンタ・カタリナと名づけている。ほかの四つはスペイン語地名（サン・イレフォンソ、サン・ロレンソ、サン・フランシスコ、サン・セバスチャン）しか書かれていないので、場所の特定が難しい。ただこれらは島と陸との間にあるとされているので、大島が浮かぶ気仙沼湾の港だろう。気仙沼の郷土史家・故西田耕三氏は階上、片浜などの可能性があると述べている（『セバスチャン・ビスカイノ金銀島探検記』）。

ビスカイノはこれらのうち最後の港について、これまで目にしたなかで最良の港だと書いている。文脈からいえば五番目のサン・セバスチャンのことだろうが、どこのことかわからない。ただ北側に高い丘があり、頂上には目印になる木が三本あって、海上の遠くからでもよく見えるという。

ビスカイノはメキシコに向かうマニラ・ガレオン船の寄港地を仙台藩領に探していたのだから、入港のための目印は大事だった。この山についても、気仙沼湾の奥にある安波山（あんばさん）か、大島の亀山か、いずれとも判じがたい。安波山の標高は239㍍、亀山は235㍍であり、ほぼ同じ高さだ。しかも湾の入り口からみれば、いずれも北の方にある。

丹念な測量

ビスカイノがとくにこの湾を気に入ったのは、わかりやすい山が目印になることと、多くの村があって人口も多く、航海に必要な物資を十分に備えているからだった。探検隊が測量のために歩いた場所には、どこでも人々が住んでいたという。

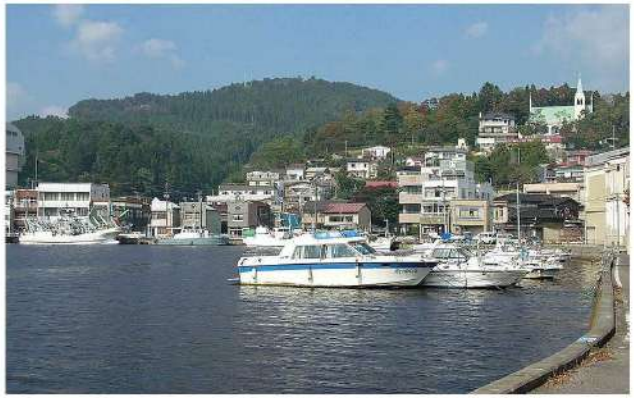
ここに二日滞在して水深を測り、地図をつくって緯度を測定したところ北緯39度だった。マニラから北上してきた力レオン船が偏西風に乗って太平洋を東に向きを変えるのが、ほぼ39度あたりだ。太平洋航路に入る前に寄港地を確保できるのが望ましい。ビスカイノが気仙沼湾を丁寧に測量したのは、その第一候補になると考えたからだろう。

気仙沼村は戦国時代からこの地域の中心地だった。天正年間（1570～90年代）から埋め立てが始まり、町場の拡大が始まったという伝承がある。この頃には金山の開発も盛んで、大坂からも浪人たちが集まってきたので大坂町という地名もあったようだ（『気仙沼旧事記』）。

ビスカイノ訪日の使命は、徳川幕府とメキシコ貿易の交渉をするためだった。じつは、もう一つ目的があった。それは日本近海にあるとされていた金銀島を探し出すことだ。ビスカイノがスペイン国王に提出した報告書が『金銀島探検報告』と題されているのは、そのためである。本吉郡・気仙郡ではこの時期、金山業が盛んになっていたが、その情報をビスカイノはキャッチしただろうか。

気仙沼湾の測量を終えて海を北上した一行は、Ｉｍａｉｃｕｍｉ（今泉。陸前高田市）に着いた。ここで一泊して翌日には、やはり大きな入江にあるＺａｃａｒｉ（盛。大船渡市）に到着。これまでの諸港に劣らない良港があったという。ここをＳａｎ Ａｎｄｒｅｓ（サン・アンドレス）と名づけた。

正保2年（1645）の国絵図に描かれた気仙沼湾と大島（国立公文書館デジタルアーカイブ）


気仙沼港から見た安波山（wikipediaより）

唐桑半島から望む大島の亀山（wikipediaより）

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。